

さまざまに新しいこと

伽藍堂

「おめでとうございます。元気なかわいい男の子ですよ」祝福の言葉と共に看護師から手渡された。軽く、首がぐらぐらしていて持つているのが面倒だ。おまけにかわいいどころか凶鑑で見た猿のような顔をしている。これをどう可愛がれというんだ。出来ることならこのまま看護師に押し付けて家に帰りたい気分だ。妻（子を生んだから母と呼んだほうがいいのだろうか）も医者も看護師も皆、示し合わせたようにこちらを見て顔に微笑みを浮かべている。こんなものを抱えているというだけでしんどいものを、さらに大勢から眺められていてはたまったものではない。ああ、早くこんな場所から立ち去りたい。しばらく子の顔を眺めている。やはりしわくちやで泣き叫んでいて持つていることが苦痛だ。もうそろそろ我慢の限界だと思ったそのときに看護師に手渡し、看護師は妻に手渡した。妻は笑いながら子を眺めている。よくそんなものをずっと眺めていられるものだ。

妻が子の口に食事を押し込もうとしている。食べやすいようどろどろにしたやつだ。初めての食事だから

とわざわざ祖父や祖母も来て見ている。物を食べる様子を見るというだけで集まるとは、こいつらは阿呆ではなからうか。子は口に異物を押し当てられ嫌がる素振りを見せる。あんなどろどろのものを押し付けられれば不快に感じるだろう、いい気味だ。しばらくすると妻の努力が功を奏したようで、子は少しずつ食事を口に始めた。祖父と祖母は声を上げて喜んでいて、物を食べたというだけのこと、大して喜ぶようなことでもなからうに。妻にいたっては涙を流している。母乳を与えるという仕事がなくなることがうれしくて泣いた、という訳でもないのだろう。おれには到底理解出来ない。

子が這って移動している様子を見るということで、なぜあのように気が違ったかのように騒ぐのだろうか。ただでさえ子のはしゃいだ声が煩わしいのに、隣に居る妻がこの様子ではおれの神経が持たない。子がこちらの方へと這ってくるが、非常にのろまで見ていてイライラさせられる。さらにおれを苛立たせるように、おれに近づく子を見て妻がまた大騒ぎをしている。妻

を突き飛ばし、この騒音の元凶である子を窓から放り投げたい気分だ。実行できればおれは非常に清々しい気分になれるだろう。

這いずり始めただけで大騒ぎだったが、歩き始めてからの妻の姿は白痴のごとき有り様だ。足を一步踏み出しただけのことで、どうしてああも馬鹿面を晒して喚いているんだ。こいつらはおれの勘に障るように日々努力を重ねてでもいるのだろうか。これがずっと続いたらおれの精神が病んでしまうだろう。ああ、こつちへ寄るんじゃない。気持ちが悪い。近づくな。おれの精神の平穏を乱そうとしやがって。こんな悪魔どもは串に刺して火にくべてやればいいんだ。そうだ、そりゃあいいなあ。そうすりやおれのこの油を呑んだような気分の悪さも少しぐらいは治まるに違いはないだろう。

ああ、とうとう恐れていたときが来たようだ。なんとこの地獄の使いはその汚らわしい口から言の葉を発し始めやがったのだ。さすれば当然あの地獄の使いの

下僕は毎度のごとくぎやあぎやあと喚き散らしておれの硝子細工のような脆い精神を摺り潰しにかかるのだ。きさまらは地獄でもどこでもおれの目に付かないところへ消えてしまえ。やつがおれを呼びながら近付いてくることを心に浮かべただけで、腹から何かどろどろとした不快で汚らわしいものがこみ上げるように感じる。ああ、やめろ。おれの方に近寄ってくるんじゃない。やめろ。口を開くな。ああ、なんてこった。おれのことを指さして、あろうことかおれに向かつて、「パパ」なんて言いやがった。畜生。やはりこんなことが続けばおれの精神は壊れてしまう。おれはこの脳髓を鼻から引きずり出されるような気分を背負って生きねばならんだ。おれはおれを恨んだ。

「どうだった」

後ろから聞こえる友人の声がひどく懐かしく聞こえる。振り向くと友人の顔が見え、おれは安堵と共に強い疲労感に襲われた。

「ひどく疲れた。あと、あれは逆効果だ。あれで親を

引き受けようなんて考えるやつは頭のいかれた野郎か、極度の被虐待趣味かのどつちかだよ」

本当にそうとしか思えなかった。あの体験にそれ以外の何かを見いだせというのは無理な相談だ。

「でもお前、おれなんか半日清掃活動だったんだぜ。

お前は幸運だよ。抽選通ったからって、広報の仮想体験受けるだけでよかったんだから」

友人は勝手なことばかり言っている。確かに抽選に通り、面倒な奉仕清掃が潰れて政府の公報映像見てるだけでいいとなったときは楽だと思っていた。けれどあんなにも苦痛を感じさせられるとは思ってもみなかった。

「大体なんで親が必要なんだよ。保育機があればそれでいいじゃないか。今までもそうだったし、これからもそれでいいじゃないか」

これはみな感じているはずだ。どうせ未だに家族制度なんて懲の生えたことを続けている一部の上流階層のやつらが言い出したんだろう。

「まあ、昔のことに学ぶこともあるかもしれないからいいんじゃないか。昔はそうだったんだろうし」

友人は、体験を受けていないからそんなことが言える

んだらう。あれを受ければきつと考えも変わるはずだ。「大体、昔は親から生まれていたんだろ。ちゃんと調整受けて造られてる今とは違うんだよ。それが解らないんだらうか」

年寄り連中は親が有った世代を上世代に見て知っているから、現代にそぐわないくだらないことを言い出すんだらう。それを新しい世代に押しつけてもろくなことにならないことは解らないんだらうか。事実おれがこんなにも苦しい思いを強いられたのだ。予算を増やして体験機の台数を増やすつもりらしいが、そんな馬鹿げたことは止めて自動掃除装置でも買えばいいんだ。そうすれば奉仕の時間もなくなっていること尽くしじゃないか。そう考えていると近くのスピーカーが突然話し始めた。

緊急放送。緊急放送。人から産まれた最後の人類である、ジェシカIIグラムさんが先ほどお亡くなりになりました。繰り返しします。先ほど、ジェシカIIグラムさんがお亡くなりになりました。人類は人から産まれた最後の人を失ってしまいました。本当に残念です。本日はすべての予定を中止しますので、みな帰宅して

ください”

突然の放送に驚いたが、おれには他人が死んだということ以上の意味は無かった。「とうとう、死んだのか」

友人も特にショックは受けていないようだった。おれもいたって平穏な精神状態である。おれは家に向かい歩き出す。空は雲一つ無く晴れていた。

了

さまざまな新しいこと

2010年 1月31日 公開

著者 伽藍堂

編集人 今出川潤

連絡先 vert@bugyo.tk

企画・制作 ver.T

<http://vert.bugyo.tk/>

このお話はフィクションです。
本作品に関する諸権利は著者自身に帰属します。
転載、引用される場合は著者および出典の表示をお願いします。